
JAIR Newsletter

No. 109 September 2006

日本国際政治学会

—特集：学会50周年を考える—

グローバル化時代の安全保障

緒方貞子（独立行政法人国際協力機構理事長）

グローバリゼーションの浸透とともに、ヒト、モノ、カネ、情報が活発に国境を越え、感染症、環境汚染、国際犯罪やテロなど、新たな脅威が拡散する。他方、国境内の紛争も増加し、国家は人々が必要とする保護と安全を十分提供することができない。旧来の国家をベースとした安全保障はもはや複雑な現在の諸脅威に対応できなくなっている。

この様な中で生まれたのが国レベルだけではなく、人々のレベルに焦点を当てた「人間の安全保障」概念である。人間の安全保障は、国際の平和と安全を築く上での重要な要素として、個人及びコミュニティレベルでの人々の保護と能力強化を強調すべきであるとしている。

では、主権国家や国際社会はどのようにして頻発する紛争の脅威から文民を保護してい

けばよいのであろうか。文民保護の基本となるのは人権の尊重であり、人道法の遵守である。また、保護の直接的手段としては人道援助が活発な展開をみせている。

国連ハイレベルパネルは、何よりも先ず非軍事的手段を通じた問題の解決のための措置により、その問題が軍事介入を要する本格的な紛争に発展することを防ぐことを重視した。そのような予防策が効をなさず、紛争が勃発した際には、最終手段として軍事的な方策を取ることもやむを得ないとしている。ただし、武力行使にあたっては、国際社会の合意と協力が不可欠であり、国連安全保障理事会による承認が必要であるとしている。

今や「人間の安全保障」に焦点をあてたグローバル化時代の平和と安全の理論構築が急がれている。

Japan and the Problem of History

G. John Ikenberry

(Professor of Politics and International Affairs at Princeton University)

Japan has a serious geopolitical problem – and increasingly it is an American problem as well.

Essentially, the problem is that Japan has not been able to eliminate the suspicions and

grievances that still linger in China and Korea about Japan's militarist part. While postwar Germany has somehow been able to put the "history issue" to rest, postwar Japan has not. The result is that Japan -- sixty-one years after its

surrender and inauguration of its long peaceful return to the international community -- remains isolated and incapable of providing leadership in a region that is quickly transforming in the shadow of a rising China.

The most visible manifestation of Japan's history problem is the controversy that erupts each year when the Japanese Prime Minister visits the Yasukuni Shrine in central Tokyo – the Shinto memorial where the names of fourteen WWII-era Class A war criminals are listed among the honored dead. In China and Korea these visits evoke the memory of Japanese war-time imperial aggression, trigger popular protests and official condemnation, and provide a readily available tool to push Japan on the defensive and shrink its regional influence and appeal.

This problem will again be highlighted on or around August 15 – the anniversary of the end of the Pacific War – when Prime Minister Koizumi makes his expected pilgrimage to the Yasukuni Shrine.

Complicating matters, the United States has urged Tokyo along the course of great power “normalization.” Indeed, some Washington strategists envisage Japan as America’s “Britain in the East” – a normalized and militarily-capable ally that can stand should-to-shoulder with the United States as it operates around the world. This is in essence the vision of the very influential Armitage report of October 2000, issued by a bipartisan group of American security specialists, and it is the dominant view among both Democratic and Republican Japanese security thinkers today.

The problem, however, is that “normalization” and “historical reconciliation” are working at cross-purposes. Normalization requires amending the constitution, acquiring new sorts of military capabilities, and breaking longstanding pacifist norms against the use of

force. Historical reconciliation requires symbolic gestures of apology and redoubled commitments to restraint and peaceful intent. This will be a tricky game to play. It is certainly going to take more enlightened and imaginative thinking than Tokyo has yet exhibited. And the United States will need to rethink its own vision of East Asia and the U.S.-Japan alliance.

There is a grand irony in the geopolitical hole that Japan has dug for itself.

The irony is that Japan has actually been a remarkably successful in defining a postwar identity for itself. Turning a necessity into a virtue, Japan celebrated its “peace constitution” and defined itself as a “civilian” great power that would invest in international peace and security under the auspices of the United Nations. It provided funding for the UN, supported international commitments to human security, and became a generous provider of official development assistance. While the wider world admires and respects Japan – and its distinctive civilian-style great power role – its neighbors do not.

Koimuzi’s term as Prime Minister will end after the elections in September – and this will be a moment when both Japan and the United States might rethink their policies.

Japan needs to find an honorable way to end the visits by the Prime Minister to Yasukuni or quietly encourage the Shinto officials who run the shrine to remove the fourteen names. But more than this, the next Prime Minister should try to make historical reconciliation a hallmark of his time in office. Japan’s ability to exert leadership in the region depends on it. Symbolic politics must be part of this strategy of reconciliation. So too must be Japan’s approach to “normalization.” Germany should be a model. Germany has normalized but it has done so by redoubling its commitments to European unification and institutionalized cooperation with neighbors. This

dual-track approach – normalization plus regional integration and order building – has helped reassure neighbors and strengthened the leadership position of Germany. Japan does not have a regional organization like the EU to tie itself to and reassure neighbors as it normalizes.

In this sense, Japan's path forward is more fraught and complicated than Germany's. What Japan can do is pursue reconciliation through regional diplomacy, offering a vision of a future East Asian security community. It would be a brilliant masterstroke if the next Japanese Prime Minister announced the end of visits to Yasukuni and invited Chinese and South Korean leaders to a summit in Tokyo. Japan should make itself the regional leader in defining the parameters of a new cooperative East Asian order – one that includes a growing Chinese role but also a central Japanese and American role. The alternative is to do what it is doing now, which is to normalize, antagonize, and grow increasingly isolated.

The United States also needs to rethink its vision of the U.S.-Japan alliance. The Armitage Report idea of turning Japan into a British-style alliance partner is not the answer

because it will inflame regional antagonisms. Washington should encourage Japan to pursue the German path, tying “normalization” to redoubled commitments to regional security cooperation. What is missing in East Asia, of course, is a regional organization that can be used to embody strengthened commitments – by Japan but also China and Korea – to peaceful regional order. The United States should work with Japan to help lay the ground work for such a regional order.

Today, the Middle East burns – but East Asia simmers. Tokyo and Washington should use the coming months to turn down the heat and add some new ingredients to the pot.

(His most recent book is Liberal Order and Imperial Ambition (Polity, 2006). This article was published in the Washington Post on 17 August 2006)

(*Ikenberry 氏の御原稿は校了印刷の朝戴いた。元々は翻訳して掲載する予定であったが、時間の制約に加え、格調高く含蓄深く鋭い文章は、そのまま会員の皆様に堪能して戴くのがベストと考え、このまま掲載させて戴いた。会員の皆様の御寛恕・御理解に感謝申し上げます。)

学会の 50 周年に期待して

宇野重昭（島根県立大学学長）

若い研究者が実務家ともども一大会を組織するというのを聞いたのは大学院学生の時代であった。そしてその 2 年後の 1958 年には、学会の太平洋戦争原因研究会に参加し、日本国際政治学会が若い世代の研究者にチャンスを与える学会であるというイメージを脳裏にすりこませた。それは、当時の国際関係研究のレベルが、国際的にも横一線に並んでいたという自負に支えられていたためかも知れない。

しかし、現実の学会を発展させたものは、

やはりアメリカをはじめとする外国の国際関係研究の刺激であった。その意味で国際シンポジウムを開くということは、10 周年、20 周年の時代の学会の当然の選択であった。それによって優れた外国の研究者にふれ、この接触を通じて会員相互の切磋琢磨も進んだ。私が学会の執行部に参加し、アメリカの ISA との連携に目を向けたのも、このような時期であった。三十周年のときには細谷千博、川田侃、永井陽之助などの諸先生を補佐し、四十周年のときには有賀貞、佐藤英夫、鴨武彦

さんらと ISA=JAIR 合同の幕張大会を企画した。もっとも私のような年長世代は ISA の政策決定の会議に参加して ISA 最初のアジア大会の誘致と準備に主力を注いだのにたいし、実質的に幕張大会で活躍したのは鴨さんたちの世代である。そして、この大会の旗印が「21世紀の役割を模索するアジア」だったことは、この時期のわれわれとアメリカの関係を象徴している。

しかし、その後学会は、外国の研究に対する過度な思い入れから卒業したようである。

組織的にも毛里和子委員長を中心とする改革検討委員会によって、合理化が急激に進められた（私は顧問であったが、そこまでの改革は予測できなかった）。それは日本国際政治学会が 50 歳の自信にみちた円熟期に入ったことを象徴している。そして、最近の学会からの『ニューズレター』を読むと、毛里改革を経てもいっそう若い世代の登龍の門としての学会の性格も連綿と引き継がれているように思われる。そこに 50 周年後の学会の更なる発展の可能性への期待がある。

学会創立 50 周年に思う

有賀貞（一橋大学名誉教授）

日本国際政治学会が今年で創立以来半世紀の節目を迎えることは、古い会員の一人として、大きな喜びであります。私は創立 30 周年と 40 周年の記念行事に関わりましたので、それらについて様々な感慨がありますが、今一番強く感じることは、10 年前と比べて、国際情勢も日本国内の雰囲気も大きく変わったということであります。

1996 年当時、日本は冷戦後の経済的低迷期に入っていました。国内には落ち着いた雰囲気があり、冷戦後の国際環境の変化にも冷静に対処しているように見えました。そのころの私は日本もついに成熟した民主主義国として国際社会に貢献できる国になってきたのだという、楽観的にすぎる安心感を抱いていました。

しかし、その後、長期化した経済の低迷からの脱却を試みる過程で、それまで戦後の民主主義の安定をもたらしていた広範な中流意識が崩れ、国民の間に情緒的ナショナリズムが生じました。それとともに、伝統的ナショナリズムに沿う愛国心の高揚によって、国民

的統一と社会的規律とを維持しようという意識が、指導層の中に強くなりました。国際環境の変化、不安定化がそのような傾向を助長しました。

近年には、日本という国の国柄を普遍的なことばで語り国際的信頼を確かなものにするという必要を顧みず、過去への回帰あるいは正当化と解釈される行動をとりながら、海外でどう受け取られるかは問題ではないと主張する独善的なナショナリズムが高まっています。小泉首相の行動はそのようなナショナリズムに正統性を与え、それを主流化してしまいました。この傾向がそのまま定着すれば、日本は再び自らを国際的に孤立する道へと追い込む危険があります。

日本の国際関係学者はいま政治家を教育できる能力を高め、冷静なリアリズムと民主主義の理念によって、難しい時代の内政外交を行なうよう、彼らに影響を及ぼす必要に迫られています。50 周年を記念する研究大会がそのような能力を高める機会となることを期待しています。

学会 50 周年に思う

大島英樹（早稲田大学名誉教授）

私が学会に入会したのは偶然からであった。62 年当時、偶々修士論文が『国際政治』20 号に掲載された際に、庶務担当の市川正明さんが私の会費分を原稿料から天引きで徴収してしまったからである。後で会計の逼迫という事情もあったと聞かされたが、こうでもされなければ自分から進んで入会する勇氣など、到底生まれなかったに違いない。

しかし、入会後は当時指導教授であった田中直吉先生の研究室が学会事務局であったので、自然とお手伝いするようになり、65 年に庶務担当、70 年に編集委員となった。76 年からは細谷（2 期）・谷川（1 期）両理事長のもとで 42 歳からの 6 年間、新設の事務局長を務め、その後、国際交流委員会主任・会計主任なども経験した。

とりわけ事務局長時代は、学会がそれまでの「個人商店」経営から、会員数の増大、活動の多様化および国際化などに呼応して、「近代経営」への大胆な組織改革に着手した時期

であった。しかも当時のこととて手作業が中心であったので事務局の仕事は多忙を極めることが多かった。財政基盤も未だに脆弱であった。しかし、この学会がそれまで古い派閥意識を越えて結束し、明るくオープンな姿勢を貫いてきたことが大好きであった私は、執行部の先生方が、この姿勢を学会の原点として堅持しつつ画期的な組織改革を次々に実現されていく様を目の当たりにして、若輩の身ながら奮い立つ思いでその末端に参加した。有り難いことに、このなかで培われた貴重な個人的関係は、今なお続いている。

学会 50 周年を迎えた現在、振り返って当時の自分を悔やむ気持ちは毛頭ない。むしろ私は、学会の目覚ましい発展の歩みを見るにつけても、当時の学会に横溢していた「原点と改革の調和」というべき基本姿勢がこれまで脈々と継承され、この伝統が広く会員の間で理解・支持されてきたのではあるまいかという思いを、あらためて痛感している。

アカデミックな研究拠点としての学会

大芝 亮（一橋大学）

今から 3 年ほど前に、「日本国際政治学会の半世紀」と題する座談会が開催された。その時に強く印象に残ったのは、学会として取り組んだ共同研究『太平洋戦争への道』（朝日新聞社、1962-63）での研究姿勢である。戦争責任論は議論が非常に政治化するので行わない、「帝国主義」という概念に縛られることを避けるために、このことばは使わない、徹底して資料に基づく客観的・実証的研究を行う、

というものである。

研究への取り組み方には、状況に応じて、さまざまなものがある。とはいえ、『太平洋戦争への道』における研究姿勢を聞いたとき、自分自身の最近の研究態度を大いに恥じざるを得なかった。一般受けしやすい政策的議論を好み、流行している概念やことばを安易に用いがちだったからである。これらは多分に私個人の問題ではあるが、大学を取り巻く研

究環境の変化にも影響されている。たとえば、競争的資金制度の導入や評価ばやりのなかで、資金の得られそうなテーマや短期間で成果を出版できそうな問題を取り扱う傾向が強まったことである。

このような社会的状況だからこそ、学会はますます重要になっている。研究者自身が問題を設定し、流行にとらわれず、地道に進めた研究について、アカデミックな立場から徹底して議論できる場を確保できるのは学会だ

からである。また、アカデミズムに固執するのは古いという見方に対して、アカデミックな研究の存在意義を訴えていくべき社会的責任も学会にはある。

学会創設 50 周年を迎え、学会の役割を見つめ直す良い機会を得た。学会には重要な役割があると考えるならば、和文・英文の機関誌への投稿や部会提案・報告希望はもとより、分科会の新設提案なども含め、学会を思う存分に活用してほしい。

日本国際政治学会 2006 年度研究大会のお知らせ

本年度の研究大会は 10 月 13 日（金）より 15 日（日）にかけ、千葉県木更津市の「かずさアカデミアホール」にて開催されます。すでに JAIR Newsletter 前号で田中明彦企画・研究委員会主任と李鍾元 50 周年記念事業委員会主任より御案内がありましたように、今秋の大会は学会創立 50 周年の記念大会であり、とくに 14 日（土）に記念部会・分科会を開催致します。

大会実行委員長として、会員の皆様にくれぐれもご注意頂きたいことは、今大会より現地会場でのコピーサービスが廃止されることです。これまで部会報告者には 50 部のペーパーの持参が義務づけられ、会場でそのペーパーの販売をおこなって参りました。また「例外的に」報告者の要望により、事務方がペーパーやレジュメのコピーサービスを提供してきました。しかし理事会決定を受け、今回の大会より報告者のペーパー持参義務はなくなり、したがってペーパーの販売もなく、また事務方もコピーサービスをおこないません。会員の皆様が事前に、大会案内の最終頁に記載する所定の URL にアクセスし、必要なペーパーをダウンロードされるようお願い申し上げます。なお会場では一部を除き、無線 Lan が利用できます。

過去の大会実行委員長より、大会期間中のコピー作業の負担が（人的と費用の両面で）非常に大きいと聞いておりましたので、大会実行委員長としては今回からの方式を大変有り難く思っております。会員の皆様のご理解をお願い申し上げます。

大事な節目となります本年度の研究大会の成功のために、会員の皆様のご協力とご支援を心よりお願い申し上げます。

（大会実行委員長 佐々木卓也）

理事会便り

50周年記念募金委員会

《50周年記念募金事業のご報告とお礼》

本学会は昨年以來、本年秋に開催される学会創設 50 周年の記念大会へ向けて、会員の皆様に募金をお願いしてまいりました。そしてこのたび、会員の皆様のご協力によりまして目標額の 2000 万円を突破することができました。このことを会員の皆様にご報告申し上げますとともに、募金にご協力くださいました会員の皆様に深くお礼を申し上げる次第でございます。

本学会はこの 50 周年記念大会へ向けて、過去何年にもわたって経費を切り詰め積立金として留保してまいりました。それが本年度で 1900 万円に達しました。そして今回の会員の皆様によるご寄付が、本年 6 月末現在で 208 万 5 千円となりました。加えて高橋産業経済研究財団から 100 万円、富士ゼロックス株式会社から 100 万円、社会科学国際交流江草基金から 100 万円をいただくことができました。これらをあわせて、本年 6 月現在で 2408 万 5 千円となりました。

改めて、ご協力いただきました会員の皆様と三つの団体に対しまして、深くお礼を申し上げます。なお、募金そのものは大会まで継続されますので、今後とも何卒よろしくお願いたします。

＜募金振込み用銀行口座＞

東京三菱銀行 武蔵境支店（店番号 4 6 4）
日本国際政治学会会計事務局主任 渡邊啓貴
普通口座 1 4 9 4 2 6 1

一口 5,000 円とさせていただきます、何口でも歓迎です。振込みに際しては、皆様のお名前がきちんと入っているかご確認ください。

（募金委員会主任 国分良成）

対外交流委員会

ISA は、3 月にサンディエゴで大会があり、JAIR からの 4 パネルに加え、多くの現地参加の大学院生の報告・活躍があった。

2005 年 8 月にイスタンブールで WISC（世界国際関係委員会）の国際会議が開かれ、JAIR も WISC 創設メンバーとして参与し、4 パネル、20 人近くが参加した。次回 2008 年は、スロヴェニアで開かれる予定である。

KAIS との協力も進み、定期交流の文書化を企画中である。

50 周年には、ISA、KAIS の理事長・事務局長を招聘して合同パネルを組む。今後も JAIR の中堅・若手の国外学会での活躍の基盤として、さらに国際交流を活性化させていきたい。

（対外交流委員会主任 下斗米伸夫
対外交流委員・ISAGoverning Council 羽場久美子）

国際学術交流委員会

2006 年度第 2 回分の国際学術交流基金助成を、以下の通り公募します。

【申請資格】

40 歳前後までの正会員（選考に際しては若手を優先します。また申請年度を含め、継続して 2 年以上会費が納入されていることが必要です）。なお、既に助成を受けた会員、40 歳以上の会員の申請は妨げませんが優先度は低くなります。

【助成対象】

原則として申請期限後 1 年以内（第 2 回は 2007 年 11 月まで）に海外で実施予定の学会等において行う研究発表（司会、討論者などは対象となりません）。なお、海外会員が他地域（日本を除く）で行う研究発表の申請も認めます。

【申請方法】

(1) 「申請用紙」と「申請上の注意」は、学会 HP からダウンロードして入手できます。

出来ない場合は、(2)の方法にて入手してください。

(2) あるいは、下記の事務局宛に、80円切手を貼付した返信用封筒を同封のうえ「申請用紙」の送付を申し出て下さい。

(3) 「申請用紙」に必要事項を記入し、「申請上の注意」で指示された必要書類（プログラムの写し、旅費の見積もり等：詳細は申請者へ通知）を添付して、期日（必着）までに郵送して下さい。

【申請期限・申請先】

(1) 第1回：2006年5月末日（終了）

(2) 第2回：2006年11月末日

申請先：〒186-8601 国立市中 2-1 一橋大学磯野研究館 日本国際政治学会 一橋大学事務局宛

【決定通知と助成金額】

申請締め切りから2ヶ月以内に採否を通知する予定です。1件の助成額は、当該年度の予算、申請額、採用者の数などに拠りますが、概ね訪問地が欧米の場合は8万から12万、アジアの場合は4万から6万程度となります。なお、問い合わせは一橋大学事務局まで。

(国際学术交流委員会主任 我部政明)

分科会

ジェンダー分科会

2006年5月、企画研究委員会および分科会責任者連絡会議を経て、理事会の承認により、ジェンダー分科会が2006年度より正式に発足する運びとなりました。これまでいろいろなことがありました。2005年初春の企画研究委員会で、国際政治学会にジェンダー研究の場を作るべきだという声が主任や他の委員から出されたこと。2005年度11月研究大会・部会「テロ後の世界とジェンダー」に多くの会員が集まり、分科会設立の意志を表明して下さったこと。理事長をはじめ、理事

や分科会責任者の方々が寛大な理解を示して下さったこと、などです。そしてもちろん、従来からジェンダー研究に携わってこられた会員や、ジェンダー研究を企画されてきた会員の努力が実った成果だと思えます。この場を借りて、皆様に深く感謝致します。

2006年度研究大会における第1回目のジェンダー分科会は、「グローバリゼーションの中の市民・女性・移民」をテーマとします。中田瑞穂さんが「東中欧におけるジェンダー問題の政治化と国際組織」について、浪岡新太郎さんが「女性にとってのヨーロッパ・ムスリム・市民アイデンティティの問題化」について報告します。討論者は羽後静子さんです。

今年は設立後の時間がなく公募で報告者を募ることができませんでしたが、来年度は公募を行う予定です。とくに若手研究者の方々は、どうぞ今からご準備ください。また、最近ご著書が翻訳された、国際政治学におけるフェミニズム研究の先駆者J・A・ティックナー教授も、50周年記念事業の関連で来日されます。これを機に国際的な交流も深められればと考えています。どうぞ皆様奮ってご参加ください。

(分科会責任者 竹中千春)

ロシア・東欧分科会

昨年11月の学会終了時点から、亜細亜大学の永網憲悟先生より責任者を引き継ぎました東海大学の宮崎英隆です。来年までの2年間、ご協力をお願い致します。

さて、この10月に開催されます2006年度日本国際政治学会のロシア・東欧分科会の報告・討論の計画段階では、この2006年が、1956年の日ソ共同宣言50周年に当たること、また東欧では同じ年にハンガリー事件が勃発したことなど、研究者レベルでは特別な年であるため、ロシア関連と東欧関連にそれぞれ「日ソ共同宣言」および「ハン

ガリー事件」を中心テーマにした特集を組むべく考えたのですが、両テーマに関する呼びかけを行えなかった時間の制約もあり、結局この構想は実現しませんでした。

しかし、「日ソ共同宣言」に関しては1名の方が、『現地時間』: ソ連崩壊後のサハリン州から見た1956年日ソ共同宣言(暫定)という報告をしてくださることになりましたし、また東欧関連の報告も、「中東欧における原子力関連施設の安全確保」という普段注意を向けないテーマで実現しました。その他、「スターリン後のソ連核開発」や「独立後のウズベキスタンの行政と議会」の報告、「ソ連崩壊における軍隊・反対政党・民族共和国の役割」をゲーム理論を用いて解明する報告が設定できました。これは一重に皆様のご協力があったて初めて実現したものです。感謝いたします。

10月の学会では、部会報告とともに分科会報告にも是非積極的にご参加いただき、活発な議論が展開されることを期待しております。
(分科会責任者 宮崎英隆)

東京地区院生研究会

このたび責任者の任を引き受けさせていただきました、東京大学大学院の五野井郁夫です。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。以下、2006年度院生研究会の活動報告をさせていただきます。

今年度の第一回研究会を以下の日程で開催します。

日時：2006年9月30日の午後14時より

場所：東京大学駒場キャンパス2号館304教室
第一回のテーマは「現代国際政治理論における覇権概念の再検討」です。

野崎孝弘会員（中部大学講師）に同会員の近著である『越境する近代・覇権、ヘゲモニー、国際関係論』を中心とした報告を、また、山崎望会員（日本学術振興会特別研究員 PD：法政大学）にディスカッションをしていただきます。

当研究会の名称は院生研究会ですが、過去に院生や助手であった会員の方のご参加もお待ち申し上げております。本研究会が、学としての国際関係論の発展に寄与すべく、会員間の自由闊達な意見交換と学問的な交流の場となるよう努力して参りますので何卒よろしくお願い申し上げます。

五野井郁夫

日本学術振興会特別研究員(DC)、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程3年
E-mail:gonoi@mac.com

研究の最前線：国際版 海外学会参加記

この間、海外の国際学会で、報告された若手研究者の学会参加記を掲載いたします。

「研究の最前線：国際版」ともなっており、ISA、SHIFRの国際学会で、JAIRの若手メンバーが活躍されていることを、ありがたく思うとともに、こうした活躍を今後も各会員が強めていただくことを期待いたします。(羽場久美子)

鏡としての国際学会

(日本学術振興会特別研究員[PD]・東京大学 多湖淳)

国際学術交流基金研究助成を受け、ISA (International Studies Association) 年次大会(2006年3月22~25日、サンディエゴ)に参加する機会を得た。「有志連合をめぐる政治」「国内政治から国際法が出現する過程を考える」という二つのパネルで、それぞれ『なぜ国家は米国の率いる有志連合に参加するのか?』『米仏の多角主義の比較研究』というペーパーを発表した (ISA 年次大会ホームページにあるリンクより閲覧可能)。

『なぜ国家は米国の率いる有志連合に参加するのか?』という報告では朝鮮戦争からソボ空爆までの15件の有志連合の事例を挙げ、連合参加国に共通する要因等について計量分析を行った。国の規模や地理的属性とい

った変数の影響が大きいことに加え、国連安保理からの授權決議の有無と内政干渉であるかどうかを連合参加国の数を統計的に有意に変化させると指摘した。

『米仏の多角主義の比較研究』という報告では、米仏両国は武力行使にあたって多角主義を全体の2割ほど活用するに留まり頻度の点で類似するものの、多角主義を活用する理由には相違があると指摘した。米国の多角主義には国内政治や経済の影響が大きいものの、フランスについては国際要因で多角主義の有無が決まるという分析結果を紹介した。

国内では得られない数々のコメントを得るとともに、仮説の内生性の問題など研究の弱点について指摘を受け、よく映る鏡の前に立たされた気持ちになった。最後に学会の皆様にご心より御礼を申し上げたい。

日本国際政治学会 2005 年度国際学術交流基金研究助成報告書

(ロンドン大学キングスカレッジ・一橋大学
法学研究科 南日 賢)

6月22日から24日にかけて、カンザス州立大学ローレンス校にて、Society for Historians of American Foreign Relationsの2006年度大会が開催された。筆者は、最終日朝のパネル'The United States, Détente, and the Transatlantic Relationship'にて、'British Official Responses to the Transformation of FRG's Ostpolitik/ Deutschlandpolitik, 1963-1969'と題した報告を行った。聴衆は30人強で、会場は満席だった。

英語で学会報告を行うのは初めての経験だったが、事前に繰り返し練習した甲斐があり、20分の報告をまずは無事に行うことができた。報告後、司会兼コメンテーターのBrian Etheridge 准教授 (Louisiana Tech)の他、Thomas Alan Schwartz 教授(Vanderbilt)、Klaus Larres 教授(Ulster)など4名から質問を受けた。将来のドイツ再統一に対するイギリス政府の姿勢とその変容とを中心に、活発

な質疑応答を行うことができた。

今回の報告は、同パネルでドゴール仏大統領のプノンペン演説に関する報告をされた鳥潟優子会員(パリ第一大学)やカンザスにて同道いただいた池田亮会員(ロンドン大学LSE)をはじめとする多くの方々のご激励とご助言、そして本学会の国際学術交流基金によるご支援に、多くを負っている。深く御礼申し上げたい。

アメリカ外交史学会に参加して

(大阪大学国際安全保障政策センター研究員
鳥潟優子)

2006年6月、国際学術交流基金の助成金を得て、カンザス大学ローレンス校で開催されたアメリカ外交史学会(Society for Historians of American Foreign Relations)の年次大会に参加させて頂いた。外交史学会では、イラク戦争の影響で、多数のベトナム戦争関連のパネルが開催され、今日のアメリカ政治外交及び社会に対するベトナム戦争の影響、そしてその包括的な研究の意義を改めて考えさせられることになった。私が参加したパネルは、ブライアン・エサリッジ教授(ルイジアナ工科大学)が司会者兼討論者をつとめられた"The United States, Détente, and the Transatlantic Relationship: Turmoil and Transition during the Vietnam Era"であった。私の論題は、"The Vietnam War and de Gaulle's Phnom Penh Speech"であり、学位論文のテーマであった1960年代のベトナム戦争に対するフランス外交に関する一局面である、プノンペン演説(1966年)を取り上げた。「演説」はこれまで、反米主義者ドゴールの単なるスタンドプレーと片付けられてきたが、ドゴールのカンボジア訪問前後に行われた仏越米間の外交的接触を新史料に基づいて分析することで、「演説」が実は、緻密な情勢分析に基づいた対米外交戦略の転換であったことを明らかにし、英加伊等による和平外交や対米政策との比較を通してフランスの

ベトナム戦争外交の特質を指摘した。エサリッジ教授やフロアーのトーマス・シュバルツ教授(バンダービルト大学)らからは、「演説」以後の時期の重要性をご指摘頂き、さらにドゴールの安全保障戦略が結果として、フランスの長期的な国益や、更に当時の国際安全保障にとってプラスになったのかどうかを検討すべき、など、有益なコメントを頂くことができた。学会参加や研究報告を通じて、アメリカの専門家と議論を重ねることができたのは、外国研究を行う筆者にとって大変貴重な機会であり、今後の研究にとっても、有意義な経験を積ませて頂くことができた。

アメリカ外交史学会に出席して

(一橋大学大学院 池田亮)

2006年6月23日から25日、カンザス州ローレンスにおいてアメリカ外交史学会(Society for Historians of American Foreign Relations)が開催された。国際学術交流基金による助成を得て、筆者は、「Decolonization and Civil War」と題するパネルで報告を行った。このパネルでは、アフリカの脱植民地化とそれに伴う内戦の危機などが、国際関係一般やアメリカ外交・内政などにいかなる影響を与えたか、広範な議題が報告された。このパネルは、アルジェリア戦争研究を専門とするDaniel Byrne氏(エヴァンスヴィル大学)が組織したものであり、司会と討論者はMatthew Connelly教授(コロンビア大学)であった。筆者の報告は、保護国であったモロッコに対してフランス政府が1955年11月に独立付与を決定した際の理由を、米英仏各国政府の一次資料に基づいて検討した。そして筆者は、モロッコ内部での国内政治勢力の対立と、それに伴う内戦勃発の危機こそが、フランス政府をして独立を決断せしめたのだと論じた。アルジェリア戦争に対するアメリカ外交研究を専門としているConnelly教授は、当時北アフリカ情勢がナショナリズム・問題の国際化・革命・冷戦が交

錯する複雑な状況にあったこと、それ故フランス政府がいかに困難な状況に直面していたかを指摘された。そして、モロッコ社会の内部に立ち入った上で、モロッコ国内情勢の分析をさらに綿密に進める必要性など、興味深いコメントと助言をいただくことができ、極めて有意義な経験となった。

研究の最前線 (第3回)

(国内外での博士号取得、国際会議報告など、若手研究者の研究報告です。ご投稿をお待ちしています)

「アジア」を語ることの政治学—アジア地域主義の言説分析

アジア地域主義については政治面、経済面から既に相当の研究が蓄積されているが、言説面、思想面からの研究は未だ発展途上の段階にある。英国エセックス大学に提出した博士論文では、アジア通貨危機前後の日本・韓国・タイ・マレーシア等の地域主義言説に着目し、地域主義がグローバル化に対して持つ共依存関係を検証した。地域主義はグローバル化に対抗する(Asianisation versus Globalisation)と同時に、それを受容・強化する(Asianisation via Globalisation)という両義性を持っている。以下、先行研究の及んでいない領域に触れつつ、拙稿でそれをどのように論じているのかについて述べて行きたい。

これまで先行研究の多くは、政治的な「地域主義」と経済的な「地域化」を分けて分析する傾向にあった。しかし、地域主義言説は政府首脳・政策担当者・企業家・知識人・市民社会等を通じて、政治的な領域と経済的な領域を横断し、相互に参照し合う言説空間を形成している。拙稿では地域主義言説が、どのように特定の政治的境界を構築しているのかに触れながら、「アジア」や「地域主義」といった語りにどのような政治的效果があるの

かを中心に考察した。

アジア地域主義の対象となる地域は、「東亜」「太平洋」「環太平洋」「アジア太平洋」「東アジア」等、歴史的に様々な名称で呼ばれてきた。既存の研究はそうした言説にどのような意味があり、その背後にどのような政治的ロジックが働いているのかについては必ずしも注意を払って来なかった。拙稿では、「アジア太平洋」という枠においてはグローバル化や自由貿易原則との整合性が、「東アジア」という枠においては東アジアの地域協力が埋め込まれていると指摘した。その上で、アジア通貨危機を前者から後者へと地域主義言説が切り替わる契機として、その変容を解析した。

更に政策と言説実践はそれぞれ別個に分析されることが多く、両者の関係性はあまり検証されていない。例えば、ウォール街のアジア的価値批判の言説と IMF の構造調整政策、また東アジア首脳会の反 IMF 言説と地域協力への政策的対応は相関関係にある。拙稿ではこの点にも着目し地域主義言説がどのように特定の政策対応を促しているのかを考察した。

また地域主義の歴史的な文脈という課題も開拓途上にある。アジア地域主義研究はその圧倒的多数が 1990 年代以降の APEC や ASEAN+3 等を分析対象としており、戦後の三木・大平構想は APEC 前史として位置付けられ、戦前のアジア主義と現在の地域主義との連続性・継続性はあまり照射されていないのが実情である。拙稿では戦前と戦後の連続性をグローバル／リージョナルという軸から再構成を試みた。

最後に今後の研究課題としては、隣接領域との比較研究を行うことが考えられる。例えば、FTA の動向についての実証研究との比較（政治的アイデンティティと経済関係の相互交渉等）、アジア主義研究等の歴史研究との比較（地域主義の歴史的構成過程等）、EU の拡大政策等の地域研究との比較（地域概念拡大の論理等）を行うことによってアジア地域主義の言説分析は更にその精度を高めていける

と考えられる。

（茨城大学、二松学舎大学・非常勤講師

大賀哲）

編集後記

日本国際政治学会 50 周年を考える特集として、大会の基調講演をいただく緒方貞子氏、英文誌の編集主幹を山本吉宣先生と共に担当されている Ikenberry 氏、またこの間、学会を学問的にもリードしてこられた先生方に、御寄稿戴いた。

学会 50 周年は、戦後 61 年の問い直しでもある。戦後と冷戦の開始から、冷戦の終焉、新時代の国際関係の変容の中で、国際政治学会が課題としてきた枠組みそのものが変化している。日本の国際政治も、「和解と正常化、地域との共存」を迫られている。現実を切り取り理論化する鋭い国際的な視点と、人に焦点を当てた「人間の安全保障」の重要性、資料に基づく客観的実証分析の必要性など、課題は山積みである。

そうした中、半世紀の国際政治研究をリードしてこられた優れた先達の方々、現代研究の最先端を担いつつ学会運営に無私に貢献されている気鋭の研究者の方々、さらに学会を基点に、世界の国際国内学会で、研究の前線を切り開くエネルギーと努力を惜しまない若手研究者の方々が、各々の場で抜きん出た活躍をされている。これこそ、この学会の最高の財産であろう。

50 周年を迎え、会員の皆様のご研究の成果を、50 周年記念大会、雑誌への投稿、さらに国際学会での研究報告、継続的分科会活動など、あらゆる場で生かして戴ければ幸いである。

（ニューズレター委員会主任 羽場久美子）

「日本国際政治学会ニューズレター No.109」

（2006 年 8 月 30 日発行）

発行人 大芝 亮

編集人 羽場 久美子

〒102-8160 千代田区富士見 2-17-1

法政大学社会学部 羽場久美子研究室

印刷所 (株)中西印刷 TEL 075-441-3155